

## 生態園で見られる両生爬虫類

栗田隆気

千葉県立中央博物館  
〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2  
E-mail: kurita@chiba-muse.or.jp

(2024年1月12日投稿; 2024年2月1日受理)

**要旨** 千葉県立中央博物館本館に併設された生態園とそれに接する青葉の森公園内で2014年から2023年に記録された両生類3種および爬虫類11種を報告した。このうちメキシコサラマンダー、ミナミイシガメ、セマルハコガメ、フトアゴヒゲトカゲの4種はペットの逸出・遺棄に由来する単発的な記録で、本地域には未定着である。一方、先行研究で記録された在来種のうちアズマヒキガエル、シュレーゲルアオガエル、ジムグリの3種は当該期間中には記録されず、現在では生態園とその周辺には生息していないと思われる。ペットの逸出・遺棄および在来種の減少は本園の都市公園としての特性が如実に表れたものであると考えられる。

**キーワード**: 都市公園, 両生爬虫類相, 時間的変化, エキゾチックアニマル, 遺棄。

生態園では博物館開館以前から動植物相の調査が実施されており、そのうち開館前にあたる1985年から1987年の期間および1988年、そして開館後の数年間を含む1988年から1993年(開館は1989年)の期間には両生類と爬虫類も調査対象とされていた(成田, 1988, 1989; 長谷川ほか, 1994)。これらの期間には逸出・遺棄による一時的な記録であることが明らか、またはその可能性が高い種も含め、無尾目7種、カメ目2種、有鱗目7種が記録されている。その後、およそ20年間に生態園の環境は大きく変化しており、1987年にほぼ裸地化されてから、現在では樹木が上空を覆うほど生育し暗い林床が発達するほど遷移が進んでいる。また、複数のネコ目哺乳類が生態園と周辺地域で新たに記録されており、両生爬虫類の捕食者となりえる大型動物相も変化している(今関ほか, 1994; 宮川・下稲葉, 2022)。これらの変化に伴って両生爬虫類相にも変化が生じていると予想される。

本稿では標本、著者を含む博物館職員による直接観察例や写真記録、来園者の撮影した写真記録など、時間、場所、同定根拠が揃った記録に基づいて、2014年から2023年までに生態園およびその周辺に広がる青葉の森公園にて確認された種を表1のとおり報告する。留意すべき点として、本報告は日中の観察例が主であるため、主に夜間に活動し、日中にその痕跡を確認するのが困難な種は見逃されている可能性があることが挙げられる。なお、表1のヒガシニホントカゲ *Plestiodon finitimus* は2012年に本州中部以東およびロシア沿海州の集団がニホントカゲ *Plestiodon japonicus* から分割され記載された種で (Okamoto and Hikida, 2012)、先行研究ではニ

ホントカゲとして報告されている。また、ツチガエル属 *Glandirana* については2022年に東北地方の太平洋側(岩手県南部)から関東地方、および中部地方の内陸部の集団が狭義のツチガエル *Glandirana rugosa* から分割、ムカシツチガエル *Glandirana reliquia* として記載されたが (Shimada *et al.*, 2022)、長谷川ほか (1994) は生態園から記録されたツチガエルは本館からの逸出である可能性が高いとしており、どの地域に由来する個体か不明であったため、ツチガエル属の一種 *Glandirana* sp. とするに留めた。クサガメ *Mauremys reevesii* については、ニホンイシガメ *Mauremys japonica* との交雑個体の観察事例もあったものの、同定を担保できる記録ではないため、ここでは一括してクサガメとして扱った。

本期間中には有尾目1種、無尾目2種、カメ目4種、有鱗目7種が記録された。このうち、メキシコサラマンダー *Ambystoma mexicanum*、ミナミイシガメ *Mauremys mutica*、セマルハコガメ *Cuora flavomarginata*、およびフトアゴヒゲトカゲ *Pogona vitticeps* はペットの逸出・遺棄に由来し、本地域での定着はしていないと考えられる。一方、ウシガエル *Lithobates catesbeianus*、クサガメ、ミシシippiaカミミガメ *Trachemys scripta elegans*、ニホンヤモリ *Gekko japonicus* は本地域において外来種ではあるが、国内に広く定着しているため、生態園への侵入・定着が自然分散によるものなのか人為的なものなのかは不明である。また、先行研究では記録され自然分布とされたもの(逸出の可能性について触れられていないもの)のうち、本調査では記録されなかったものとしてアズマヒキガエル *Bufo formosus*、シュレーゲルアオ

表 1. 生態園を含む青葉の森公園内で記録された両生爬虫類.

調査期間	成田 (1988) 1985-1987	成田 (1989) 1988	長谷川ら (1994) 1988-1993	本報告 2014-2023
有尾目				
メキシコサラマンダー *				+
無尾目				
アズマヒキガエル	+	+	+	
ニホンアマガエル		+	+	+
ニホンアカガエル *			+	
ウシガエル	+		+	+
ツチガエル属の一種 *			+	
トウキョウダルマガエル *			+	
シュレーゲルアオガエル		+	+	
カメ目				
クサガメ	+		+	+
ミナミイシガメ *				+
セマルハコガメ *				+
ミシシippアカミミガメ *			+	+
有鱗目				
ニホンヤモリ				+
フトアゴヒゲトカゲ *				+
ヒガシニホントカゲ	+	+	+	+
オカダトカゲ *			+	
ニホンカナヘビ	+	+	+	+
ジムグリ			+	
アオダイショウ	?	+	+	+
シマヘビ	+		+	+
ヒバカリ			+	+

\*：逸出・遺棄による単発的な記録であることが明らか、またはその可能性が高い種.

ガエル *Zhangixalus schlegelii*, ジムグリ *Euprepiophis conspicillatus* がある. このうちジムグリは主に昼行性, カエル類 2 種は主に夜行性だが時期次第で日中でも卵塊や幼生, 鳴き声によって生息が確認できるため, 単なる見逃しではなく, 実際に現在では生態園内に生息していない可能性が高い.

先行研究と本報告の比較により, 両生爬虫類相から見た生態園は都市公園としての特徴を強く備えた場所だと言ってよいと思われる. 長谷川ほか (1994) では成田 (1988, 1989) と比較して, ニホンアカガエル *Rana japonica*, ツチガエル属の一種, トウキョウダルマガエル *Pelophylax porosus porosus*, ミシシippアカミミガメ, オカダトカゲ *Plestiodon latiscutatus* の 5 種を新たに本園における外来種として挙げているが, そのうちミシシippアカミミガメ以外の 4 種は博物館施設からの逸出である可能性が高いとしており, 実質的にはミシシippアカミミガメのみがペット由来の可能性のある種である. 一方, 本報告ではメキシコサラマンダー, ミナミイシガメ, セマルハコガメ, フトアゴヒゲトカゲの 4 種がペット由来であり, 遺棄される種の数が増えたことがわかる. 生

態園および青葉の森公園が一部の利用者によって飼育しきれなくなったペットを遺棄する手頃な場所として悪用されていることは疑いようがない.

一方, 現在では見られなくなった在来カエル類・ヘビ類もおり, その原因は不明だが, これらは集団の存続に安定した森林環境や産卵に適した止水環境を必要とする種であるため, 生態園開園前後に顕著であった植生の不安定さや陸水環境の乾燥化が一因となっている可能性がある. また, 長谷川ほか (1994) はアズマヒキガエルの減少の原因としてホンダタヌキ *Nyctereutes procyonoides viverrinus* の定着を挙げたが, 現在では本種に加えてニホンアナグマ *Meles anakuma*, アライグマ *Procyon lotor*, ハクビシン *Paguma larvata*, ネコ *Felis catus* が生態園とその周辺で記録されている (宮川・下稲葉, 2022). 後者 3 種は外来種であり, とくにアライグマとネコは広く問題視されているとおり侵略性がきわめて高く, 本園の動物相にも大きな影響を与えている可能性がある. 園内ではアライグマの防除を実施しているが, その一方で青葉の森公園ではいわゆる地域猫が許容され, 完全には人間の管理下に置かれていないネコが多数生息しており,

生態園内でもしばしば観察されている。人間に食物を与えられているネコといえども一定程度野生動物を捕食していることがわかっており（たとえば Weber and Dailly, 1998; 城ヶ原ほか, 2003; Piontek *et al.*, 2021）、地域猫による捕食圧が生態園の両生爬虫類相に負の影響を及ぼしている可能性がある。

### 引用文献

- 長谷川雅美・山口剛・高山一明. 1994. 生態園における動物相の変遷：植生の変化にともなう棲息場所の消長と大型捕食者の影響. 千葉県立中央博物館自然史研究報告特別号 1: 189-203.
- 今関真由美・山口剛・落合啓二. 1994. 生態園及び周辺地域における哺乳類の生息状況. 千葉県立中央博物館自然史研究報告特別号 1:205-214.
- 城ヶ原貴通・小倉剛・佐々木健志・髙原建二・川島由次. 2003. 沖縄島北部やんばる地域の林道と集落におけるネコ (*Felis catus*) の食性および在来種への影響. 哺乳類科学 43(1):29-37. <https://doi.org/10.11238/mammaliancience.43.29>
- 宮川尚子・下稲葉さやか. 2022. 千葉県立中央博物館敷地内（千葉市中央区）におけるニホンアナグマ *Meles anakuma* の出現記録. 千葉県立中央博物館研究報告 16(1):69-72.
- 成田篤彦. 1988. 青葉の森, 舟田池の周辺の両生は虫類相. 所収 千葉県自然誌資料調査会（編）昭和 62 年度千葉県立中央博物館（仮称）設置に係る自然誌資料の所在調査及び収集事業報告書 pp.52-53. 千葉県教育委員会.
- 成田篤彦. 1989. 生態園の動物相調査（1）両生爬虫類相. 所収 千葉県自然誌資料調査会（編）昭和 63 年度千葉県立中央博物館自然誌資料調査・収集事業報告書 pp.52-53. 千葉県教育委員会.
- Okamoto, T., and T. Hikida. 2012. A new cryptic species allied to *Plestiodon japonicus* (Peters, 1864) (Squamata: Scincidae) from eastern Japan, and diagnoses of the new species and two parapatric congeners based on morphology and DNA barcode. *Zootaxa* 3436(1):1-23. <https://doi.org/10.11646/zootaxa.3436.1.1>
- Piontek, A. M., E. Wojtylak-Jurkiewicz., K. Schmidt, A. Gajda, M. Lesiak and I. A. Wierzbowska. 2020. Analysis of cat diet across an urbanization gradient. *Urban Ecosystems* 24:59-69. <https://doi.org/10.1007/s11252-020-01017-y>
- Shimada, T., M. Matsui, M. Ogata, I. Miura, M. Tange, M. S. Min and K. Eto. 2022. Genetic and morphological variation analyses of *Glandirana rugosa* with description of a new species (Anura, Ranidae). *Zootaxa* 5174(1):25-45. <https://doi.org/10.11646/zootaxa.5174.1.2>
- Weber, J.-M., and L. Dailly. 1998. Food habits and ranging behaviour of a group of farm cats (*Felis catus*) in a Swiss mountainous area. *Journal of Zoology* 245(2):234-237. <https://doi.org/10.1111/j.1469-7998.1998.tb00096.x>

## Herpetofauna at the Ecology Park, Natural History Museum and Institute, Chiba

Takaki Kurita

Natural History and Institute, Chiba  
Aoba-cho 955-2, Chuou-ku, Chiba 2608682, Japan  
E-mail: kurita@chiba-muse.or.jp

Three species of amphibians and 11 species of reptiles were recorded in the Ecology Park attached to the Natural History Museum and Institute, Chiba and in the adjacent Aoba-no-mori Park, from 2014 to 2023. Four of these species, *i.e.*, *Ambystoma mexicanum*, *Mauremys mutica*, *Cuora flavomarginata*, and *Pogona vitticeps*, were one-off records probably due to escape or abandonment of pet animals and have not been established in this area. On the other hand, three of the native species recorded in the previous studies, namely *Bufo formosus*, *Zhangixalus schlegelii*, and *Euprepiophis conspicillatus*, were not recorded during the period, and are considered to be no longer present in the Ecology Park and its vicinity. The abandonment of pets and the decrease in the number of native species are considered to reflect the characteristics of an urban park.

Key words: urban park, herpetofauna, temporal changes, abandoned pet animals, herpetoculture